

坂戸の大宮住吉神楽

大宮住吉神楽保存会

国選択・埼玉
県指定無形
民俗文化財

大宮住吉神社 前夜祭 神楽奉納 演目紹介

<令和8年4月4日(土)>

夜神楽18時開始

(翌日5日(日)の例大祭でも AM9:30~PM3:30まで神楽5座上演)

18:00~

①「姫舞」(ひめまい) [榊(さかき)の舞] <約 15 分間>

②「姫舞」(ひめまい) [弓矢の舞] <約 15 分間>

◎四方神楽などを姫が舞います。練習中の中学生が舞う予定です。



③醜女八人の座(しこめはちにんのざ) <約 30 分間>

<登場神：伊邪那岐命いざなぎのみこと・伊邪那美命いざなみのみこと (=醜女しこめ)・久那戸神くなののかみ>



古事記や日本書紀の神話で、黄泉の国の話として描かれているものを元にした座です。神話の概要は次のとおりです。

～伊邪那岐命が、亡くなった妻の伊邪那美命を追って黄泉の国」まで行き再会しますが、妻に見てはいけなと言われたにもかかわらず、妻の亡くなった後の姿を見てしまい、逃げ出しました。恥をかかされたと怒った妻の伊邪那美命は、醜女を遣わして伊邪那岐命を追いかけます。伊邪那岐命は醜女に対して、髪飾りなどを投げつけ逃げ帰ります。～

実際の神楽のこの演目では、伊邪那岐命が持つ鏡に自分の美しい姿を写している伊邪那美命は、実は醜い醜女(しこめ)

であり、やがて本性を表して伊邪那岐命から鏡を奪うという筋立てになっています。

そして、久那戸神が伊邪那岐命が持っているはずの鏡が無いことに気づき、激しい戦いの後、醜女から鏡を取り返すという話になっています。

醜女の付ける面は最初、女性の姫の面ですが、鏡欲しさのあまり、醜い本性が表れ般若の面が変わっていきます。面の早変わりが見どころとなります。

<座の流れ>

① 伊邪那岐命(姫の恰好)登場→②醜女(=伊邪那美命)登場→③醜女が伊邪那岐命の鏡を羨ましそうに見ている→④無理矢理に鏡を奪う→⑤久那戸神登場→⑥鏡が無いことに気付く→⑦久那戸神と醜女の剣を交えた戦い→⑧鏡を取り返す→⑨全て下がって終了

④夜遠呂斯の座(やおろしのざ) <約 20 分間>

<登場神：夜遠呂斯命(やおろしのみこと)>

夜遠呂斯命が剣を持って八方神楽を舞う1人舞です。夜遠呂スとは「夜を降ろす」の意味と考えられ、天照大神が岩戸に隠れ、世の中が暗闇になってしまったことを表現しています。

この次に奉納する天岩戸開の座の前の座として演じられてきたといわれています。

大宮住吉神楽にしか存在していない演目で、近年復活した座ですが、今回は新人が舞います。練習の成果をご覧ください。

⑤天岩戸開の座(あまのいわとびらきのざ) <約 35 分間>

<登場神：天照大神・天布戸玉命・天児屋根命・天宇受売命・天手力男命>

天照大神(あまてらすおおみかみ)が弟のスサノオの命の乱暴狼藉を嘆き、天の岩戸に籠ってしまったため、世の中が闇に包まれてしまいました。困った神々が集まって相談し、天布戸玉命(あめのふとだまのみこと)や天児屋根命(あめのこやねのみこと)が焚火を炊き、天宇受売命(あめのうずめのみこと)が肌を露わにして踊るので、神々が大笑いしたところ、天照大神が何事だろうと気になって岩の間から覗き見ました。そこを天手力男命(あめのたちからおのみこと)が刀で岩をこじ開けて、天照大神を連れ出し、世の中が再び明るくなった、という話です。

その後、5柱の神様で神楽を舞います。5柱の神で舞うため、この舞を「五行の舞」(ごぎょうのまい)ともいいます。練習中の中学生達が一生懸命舞います。

<明日(4月5日(日))の「例大祭」の予定演目>

AM9:30~PM3:30(予定)

※時間は大まかな予定で前後することがあります。

- ①六合堅固(翁)の座(9:30~9:50)
- ②住吉三神の座(10:00~10:40)
- ③倉稲魂命種蒔の座(11:00~12:30)
- ④猿田彦命四方剣拜の座(13時過ぎ頃~20分間)
~天下祭(天狗を先頭に参道を行列が歩む行事)
(14:00~15:00)
- ⑤神剣貢の座(15時頃~20分間)
- ⑥終祓(終了15:30頃)



<大宮住吉神楽について> 大宮住吉神楽の由来については、江戸時代の寛永年間(1600年代)には、東京都府中の大國魂神社に奉納されていたことが分かっており、少なくとも作られたのはそれ以前に遡ると伝わる。12座の神楽と10座の座外神楽及びその他神楽を合わせて全部で22座あり、現在舞われているのはその内の15座程。神社の祭礼である4月第一日曜日の例大祭、11月23日の新嘗祭、2月23日の祈年祭で神楽が奉納されており、その他神社やイベント等での披露実績も多数ある。特徴は、江戸里神楽の古い様式を良く残していることで、黙劇仕立ての古風で素朴な神楽である。大國魂神社に奉納していた3つの江戸里神楽の流派のうち「勝呂方(すぐろかた)」として、最も江戸里神楽の原型を良く残していると言われていた。江戸里神楽が興行化していった傾向も江戸期頃にはあった中でも、現在まで地元住民を中心に古い形を残し継承されている。